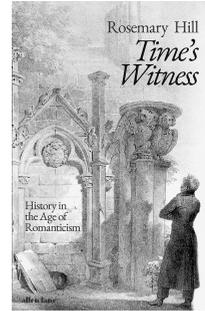


## 書 評

Rosemary Hill, *Time's Witness: History in the Age of Romanticism*  
(Allen Lane, 2021)



大石 和欣(東京大学)

1818年2月4日、エディンバラ城の王冠室にてスコットランドの王冠が、1707年の合同法から111年ぶりに日の目を見た。それから4年後の1822年8月には即位後まもないジョージ4世がエディンバラを訪問し、キルトを纏った人びとから熱烈な歓迎を受けた。式典では王冠と刀剣が掲げられ、中世風の弓を携えた弓部隊が随行し、氏族長たちがアッセンブリー・ルームズで国王に拝謁した。

一連のイベントはウォルター・スコットによる演出だった。まだ撰政だった頃のジョージ4世にスコットランド王家の血が流れているのを彼が指摘したのが端緒だったが、式典に前例はなく、彼がでっちあげた「慣例」によって構成された。刀剣は借り物だったし、弓部隊は近世以前のスコットランドに存在しなかった。キルトも正装ではなかった。

同時代の批評家ハズリットが指摘したように、そもそもスコットが目論見には「反乱の影」が見え隠れしている。1715年と1745年のジャコバイト反乱は依然としてスコットランドに影を落としており、1820年には急進主義者による暴動の兆候もあった。国王歓迎式典は、スコットランドの歴史とアイデンティティを再構築することでそうした反イングランド感情を抑止し、グレート・ブリテンという国家意識を醸成するという矛盾を孕んだ試みだった。それは歴史小説『ウェイヴァリー』のテーマそのものであり、スコットにしか筋書きを書けない政治劇だった。

エリック・ホブズボームが言う「伝統の創造」の一例として片づけたいくなるが、本書においてローズマリー・ヒルは、18世紀半ば以降に高まる故事物研究熱が、ロマン主義歴史小説家であるスコットに具現することで、ナ

ショナル・アイデンティティ構築を促し、国家的な役割を果たしていく過程の一段階として描いている。ヴィクトリア女王のバルモラル城購入に見られるように、以後王室はスコットランドと結びつきを強め、<sup>アンティクリアニズム</sup>故事物学者が集ったケンブリッジ・カムデン協会は国教会の重鎮を巻き込んでゴシック様式の教会を各地に建立し、1834年に火難にあった国会議事堂もゴシック様式で再建されることになった。

18世紀の故事物学については、ローズマリー・スウィートによる『故事物学者たち－18世紀ブリテンにおける過去の発見』（2004年）がすでに全容を解明している。それに対してヒルの研究書の特色は、石器時代やローマ時代、アングロ・サクソン時代に関する故事物学を捨象し、ややカトリック寄りの故事物学の系譜を視座に含めることで、ゴシック教会や中世の室内装飾の研究、写本などの古文書の保存、宗教改革以前の地誌の編纂が巨大な知的ネットワークを通して遂行され、それが19世紀に発展を遂げて影響力を発揮し、やがてナショナル・アイデンティティの構築へと至り、国家的・国民的遺産として認識されるようになった過程を詳述した点にある。『神の建築家－ピュージンとロマン主義的ブリテンの建築』（2007年）の著者ならでは視座と言える。ピュージンが登場した意義と背景を大きなスケールで解き明かそうというのが動機だと推測すると納得がいく。

故事物学は古代ギリシア・ローマにも存在したが、イングランドでは宗教改革期に興隆する。『ブリタニア』を著したウィリアム・カムデンは有名だが、ヒルはヘンリー8世の命により解体直前のカトリック修道院の古文書を渉猟したジョン・リーランド、そうした古文書に基づき宗教改革以前の修道院について17世紀になって総覧を著し、さらに地方史の範型となる『ウォリックシャー史』も編纂したウィリアム・ダグデイルにも光を当てる。ストーンヘンジについて論究したジョン・オーブリーを含めた故事物学者たちは王立協会で意見交換をしていたが、18世紀初頭に故事物協会が設立されると、そこを軸にして故事物学は発展する。

18世紀末になると、地誌を体系化したジョン・ブリトン、製図家ジョン・カーター、ブリティッシュ・ミュージアムの司書官を務めたヘンリー・エリス、カトリック男爵家を継いだジョン・ゲイジ、多言語学者のリチャード・ゴフ、アングロ・サクソン年代記を逐語訳したアナ・ガーニー、ノルマン

ディーの故事物調査を著書にまとめた製図家チャールズ・ストサーズと妻のアンナなど、男性ばかりではなく女性たちも、それぞれ異なる領域で故事物学を追究し、成果を公表していった。彼らの新たな情報交換の場として機能したのが、1787年にジョン・ニコルズが編集責任者となった『ジェントルマンズ・マガジン』誌だった。

とはいえ社会的地位が低く、政治権力からも無縁な故事物学者たちは常に体制側からの干渉・抑圧や冷笑・誹謗に晒されていた。ジェイムズ・ワイアットによるソールズベリー大聖堂の改修に際して、ゴフやカーターたち故事物協会員が原型を記録に留めようとしたところ、ワイアットと主教によって阻まれてしまう。それでも中世遺物に対する彼らの関心は衰えることなく、ジョン・ミルナーの『ウィンチェスターの故事物の歴史と概要調査』やヨーロッパにまで足を伸ばしたジョージ・ウィットイントンの『フランスの教会故事物の歴史的概要調査』などにより、ゴシック建築についての知識は積み上げられていった。

故事物研究熱は、ピュージンが得意とした室内装飾や教会内装の洗練、ワーテルローの戦場見物と遺物蒐集、ストラットフォード・アポン・エイヴォンにおけるシェイクスピアゆかりの地の整備と観光地化、また演劇舞台演出における歴史考証の採用にも波及していった。

ヴィクトリア女王が即位する頃になると、故事物学者はより科学的になり、考古学者、建築家、官吏として「リアリティ」を追求しはじめた。ヒルが言う「リアリティ」とは、美的・道徳的理想としてのゴシック様式が「物理的かつ倫理的な明瞭さ、真摯さ、誠実さ」(p. 250)を具現していくことである。ケンブリッジ大学教授ロバート・ウィルスによる中世教会のアーチ型天井に関する講義は工学的専門知識に基づいていた。ケンブリッジ・カムデン協会も「教会学の専門知」を追究することを謳い、その流れを受けてオックスフォード運動はゴシック様式の教会を全国に建立していった。

「リアリティ」をもっとも鮮烈に実現したのはピュージンだった。彼はゴシック様式に「感情的・道徳的義務」の意味を加え、1829年のカトリック解放令後の国土をカトリック色の強いゴシック教会で塗り替えていった。彼の『対照』(第2版1841年)は、貧民や労働者が救貧法や工場に抑圧されている同時代の社会を、中世の教会が保持した豊かな共同体との比較を通

して批判したが、それこそが彼が教会建築に込めたメッセージである。ゲイジの研究書に触発されて、ベリー・セント・エドマンズ修道院の生活と院長サムソンを理想化したカーライルの『過去と現在』も同じ「リアリティ」追求の形である。ゴフやカーターが主教に邪魔されたのは過去の話で、今や故事物学者が教会と社会を支配していた。

興味深いのは、戦争状態にあった時でも英仏の故事物学者たちが継続的に交流したことだろう。結果としてイギリスの故事物学の手法や成果、遺物保存のノウハウがフランスに普及した。ルノワールは革命政府が禁じた教会や王室のイコノグラフィなどを収集・保管し、イギリスに一時亡命したフランシス・ド・ラルュはフランシス・ドゥースと交流してバイユーのタペストリーを含む故事物研究を推進することになったし、「死の舞踏」に関するドゥースの中世研究はフランス故事物学者の助言なしでは結実しなかった。また、蒐集された故事物を幼少期に目の当たりにしたヴィクトル・ユゴーは、ロマン主義小説家として『ノートル＝ダム・ド・パリ』を含めた小説群に歴史的感性を埋め込んだ。ゴシック建築家ヴィオレ・ル・デュックの登場と活躍も、英仏の故事物学交流という土台があったからこそである。ゴシック建築熱はドイツも巻き込み、中断されていたケルン大聖堂の建設が再開され、完成に至る。

こうした示唆に富んだヒルの叙述だが、故事物学者たちが言語化・形象化した「歴史」、あるいは彼らが発掘し、再構築した「歴史意識」が、現在の歴史学から見てどう位置づけられるかについては寡黙である。啓蒙期のヒュームやギボンも史実や歴史的物事を重んじたが、故事物学者たちは「風俗や習慣」を含めた生活文化や共同体のあり方といった全体像のなかで歴史的眞実を究明しようとし、必ずしも「前進や改善」の物語に歴史を回収しようとしなかった点で健全かつ先進的な歴史観を保有していた。社会史や文化地理学、文化人類学にもつながる要素も胚胎している。建築物や石像、衣服など物から過去の史実や社会の実態を解明しようとした彼らのアプローチは、精度や洗練度が低いにしても、物質論的転回を経た今の歴史学研究にも通じる。

だが、本書ではそうした現代の多様な歴史研究手法と比較されることなく、故事物学は「ロマン主義」と結び合わされて終わっている。両者の関

係にも問題はあある。ロバート・バーンズと交友を重ね、スコットランド各地の方言や口承、民謡から過去を再構築したフランシス・グロスや『ウェイヴァリー』および『<sup>アンティクアリアン</sup>故事物学者』を書いたウォルター・スコットがその代表格に数えられるが、故事物学とロマン主義との相関性は曖昧である。定義が多岐にわたることを認めつつ、ロマン主義が故事物学に「思考と感情の混成」に基づいた細部の吟味と、一次史料と物的証拠の「直接検証」という経験主義を促し、「感受性と想像力」を通して歴史を個人の集合体として考究する態度を植えつけたという主張 (p. 4) だけでは、時に同義語のように故事物学とロマン主義を併記する本書の議論を正当化できない。

また、故事物学をカトリック寄りに論じる傾向もあり、ラスキンやウィリアム・モリスに顕著なプロテスタント的中世主義を説明しきれない点も気になる。その点、邦訳されたマイケル・アレクサンダー『イギリス近代の中世主義』野谷啓二訳 (2020年) のほうが痒いところに手が届く明快かつ網羅的な説明に富んでいる。

とはいえ、スコットやユゴーの文学に典型的なロマン主義時代の故事物趣味に潜む巨大かつ強力な文化的枠組みと思考様式をヨーロッパ規模で詳述することで、本書は価値ある情報と洞察を提供している。